

お松の池

世の中には趣味なのか本職なのかの区別の付かない芸達者がいる。十一月三十日妻と六日町に出かけた。新潟県作詞作曲家協会の忘年会に参加するためだ。二十九日は中越地方に雪が降ると聞いていたが道路が雪道になるとは思わずに出かけた。新潟から六日町まで120 kmある。高齢で軽自動車なので時速80 kmで休憩を取りながら走った。六日町は豪雪地帯で現地に着くと道路以外は雪で覆われていた。スキー客用のホテルでまだスキーは出来ないで空いていたがシーズンになると混雑するのだろう。このホテルは天然温泉掛け流しの浴槽があり寒い冬のためか窓は二重サッシ、庭の木の雪囲いは太い竹でしっかり囲まれていた。

私も妻も日頃は歌番組も見ないし唄も歌わない。そのくせ今年10月に私の第一作目CDを出した。作詞信濃川一平の「新潟フンディー」と「ママと一緒さ」だ。作詞家のデビューである。参加者は25人ほどで半数は会員でホテルのステージを借り切つてのカラオケ大会である。何曲もCDを出しているプロの歌手や歌唱指導や作曲家も参加しているので今まで行ったカラオケボックスでの仲間の歌とは桁違いである。

芸達者の集まりと感じたのは、保育士をしている女性の紙芝居「食べられたやまんば」や南魚沼に民話として伝わる「上ノ原 お松」の語りがあった。紙芝居は数十年見えていないが紙芝居の内容より声の調子や仕草が面白く子供が喜びそうである。語りは、雪のない地方から雪深い魚沼に嫁ぎ姑に機織りのきつい指導を受け、辛くなって池に入水自殺する内容で女講師師のようであった。

それぞれが出し物をする。私も妻も無芸なので「新潟フンディー」のルンバの曲に合わせてステージでダンスを披露した。歌や紙芝居の後なので盛り上がり好評だった。翌朝はホテルから200メートルほどの距離にある「お松の池」を見たが池の周囲は雪景色、鴨が泳いでいた。昨夜聞いた民話のこともあり良い想い出になった。